

世界が水を奪い合う日・日本が水を奪われる日

橋本 淳司著

最近、文化（思想）とか政治よりも「文明」のほうが、ずっと大切で、文明と経済の座標軸の二次元で日本人の生活を考えることが増えている。文明とは気候、水、鉱物資源、地形、隣接する民族と



の関係など簡単に考えられない生活条件であり、また、それに対応した生活の仕方、智

タダと考えている水の文明的危機を指摘

恵の総体だ。エコもその一つ。文明が経済を制約するのであって逆ではない。

著者の橋本氏は日本人がタダと考えている水の文明的危機を指摘している。初めの水に恵まれない国のルポがすぐある面白い。が、それは読者

に読んでいただくとして、橋本氏が指摘する日本の水問題を挙げてみよう。①日本は輸入食糧の中に含まれていたり洗浄に使ったりする過程で外国の水を大量に消費している。食料自給率が減ると歩調をあわせて水の海外依存が

はパロン社の顔色で決まるようになってきているのだ。③生物浄化法（緩速ろ過）の優秀な小型プラントが日本で開発された。発展途上で重宝されているのに、顔の見えない日本のODAで現地では他国の援助と勘違いされている。④

高まっている。危機管理の問題として捨ておけない。②水事業の民間委託がはじまっているが、世界の水事業はフランスのウォーター・パロンという会社が握っている。日本でもウォーター・パロン社の動きは活発になり、日本の水源に近い農村、山林から人口

日本の地方自治体の水道料金は上昇が止まらない。多くは人口が想定より減ったからだ。

世界の中で日本ほど水が豊かな国はない。なのにこれだけの問題があるのは結局、水源に近い農村、山林から人口

が離れ、都会地に一極集中したからだ。水の消費者ばかりが増えているせいだ。この本が書かれた段階では例の八ッ場ダムの問題は起きていなかった。「工事中止」は政治の問題としても、ダム底に沈むはずだった集落の人々の生活はどうなったら水文明に良いのか。橋本氏の今後の研究が待たれる。

評者 英之 梶原 ジャーナリスト 経済

(PHP研究所 1680円) ☆はしもと・じゅんじ 1967年、群馬県生まれ。学習院大学卒。書道家。「水」を主たるテーマに執筆活動を行う。著書に『水の大研究』『水問題の重要性に気づいていない日本人』など。